



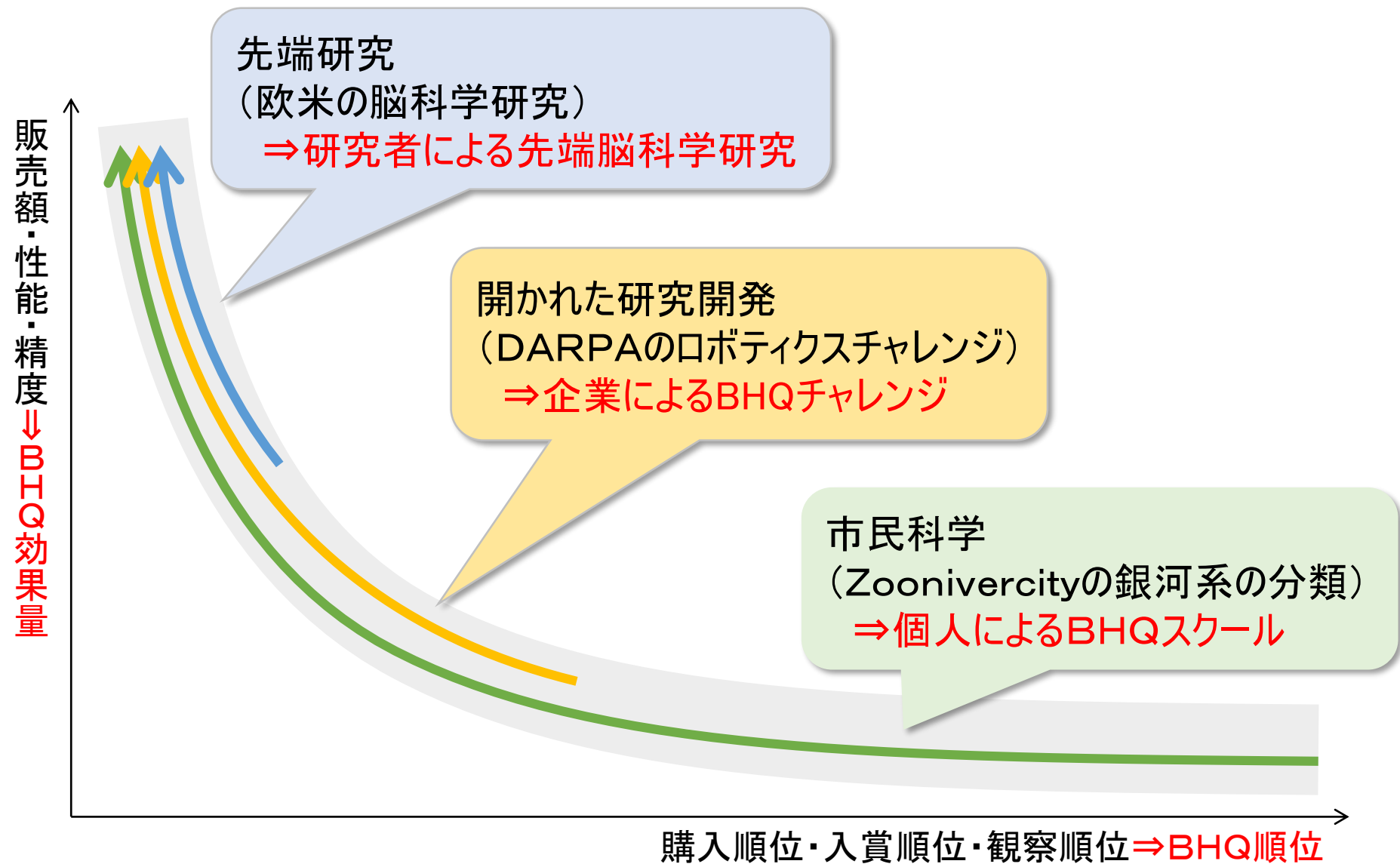
『脳情報の可視化と制御による活力溢れる生活の実現』2016年度シンポジウム

脳情報の産業化に向けた 市民科学と国際標準化の展開

2017年2月23日

内閣府 革新的研究開発推進プログラム(ImPACT)
プログラスマネージャー補佐 岡宏樹

ロングテールを意識したオープンサイエンス



BHQを使った市民科学：BHQスクール

専門家と同様に
BHQを活用



飲料

運動

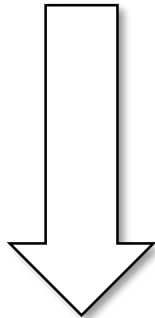
趣味

自分のBHQを使って
自分のアイデアを検証し
結果を共有

BHQスクールの流れ

～BHQスクールのプロセス～

実施前のMRI撮像
＋健康状態に関する質問



各人が考える
アイデアの実践
約1ヶ月

実施後のMRI撮像
＋取り組みについての質問



BHQで評価・結果共有

アイデア例

(運動系)

- ・ 毎日帰宅時に3kmほど歩いてみる

(食事系)

- ・ 朝食に温かい食べ物を食べる

(趣味)

- ・ 毎日頭を使うため、専門書を1節以上理解していく

(ワークスタイル)

- ・ 仕事を無理に続けず、嫌になったら新しいものに切り替える

現在、トライアルとして約100名の参加者が各々のアイデアを評価中

市民科学を支えるレポート

スクール実施前のBHQ
BHQを用いつつ
より簡易な表現で共有

スクール後のBHQ変化値
視覚的にわかりやすい
表現で共有

新しいアイデアの参考情報
BHQを高めた多様な
取り組みを共有



新しい情報を提供するためレポートのコンテンツを継続的に更新

ITU-Tにおける国際標準化活動

ITU-Tについて

国際連合の専門機関(@ジュネーブ)

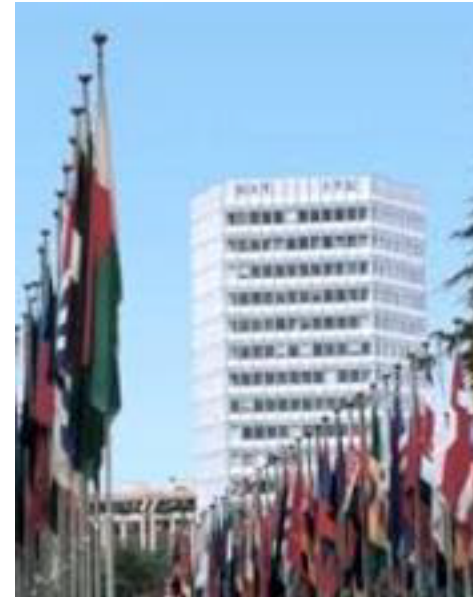
電気通信に関する国際標準を策定

WHOと連携しeHealthの標準化を推進

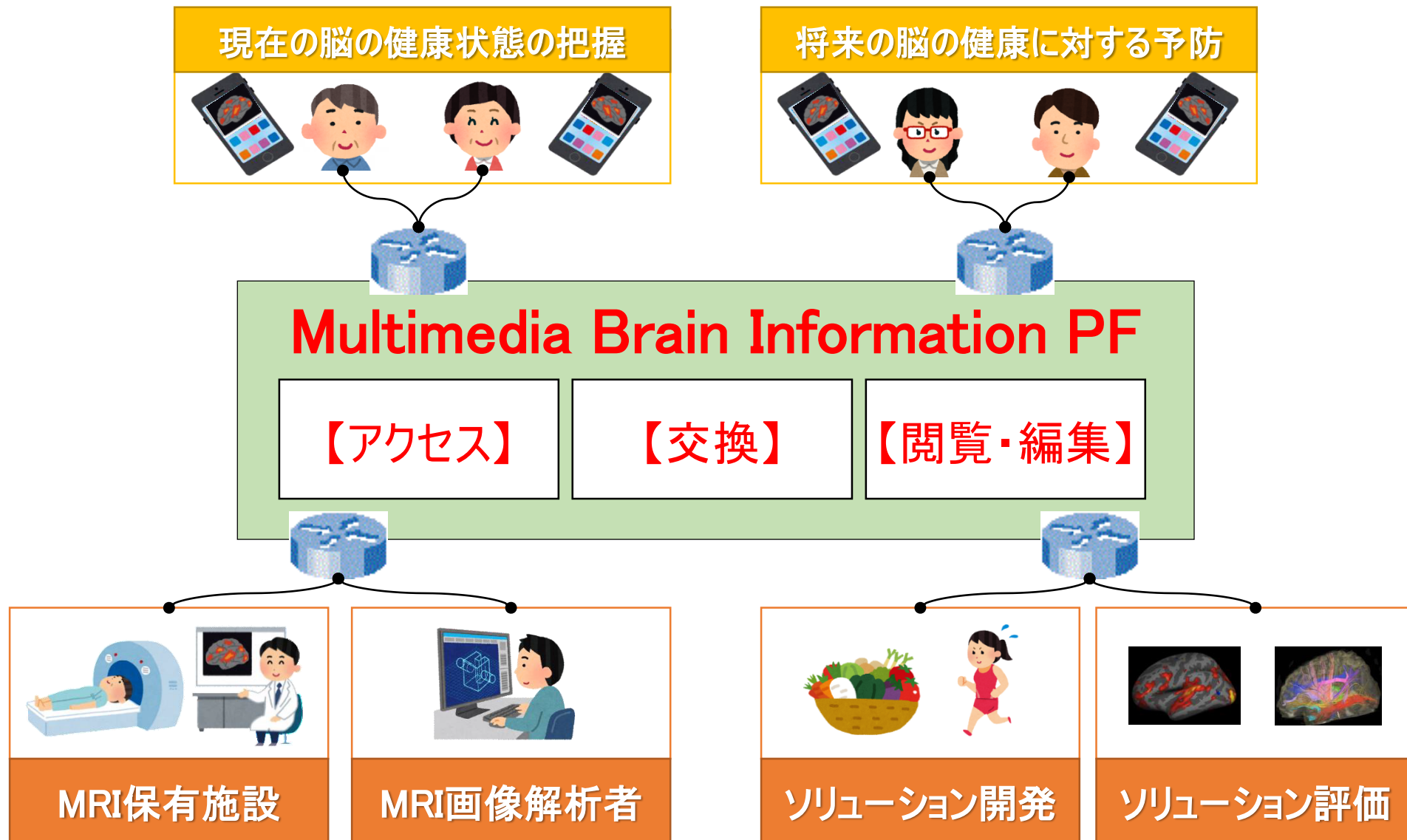
ImPACTより脳情報に関する標準化を提案

現在、3つのワークアイテムが進行中

1. 脳情報のデータシェアリング
2. 脳情報のユースケース
3. 脳情報の評価標準



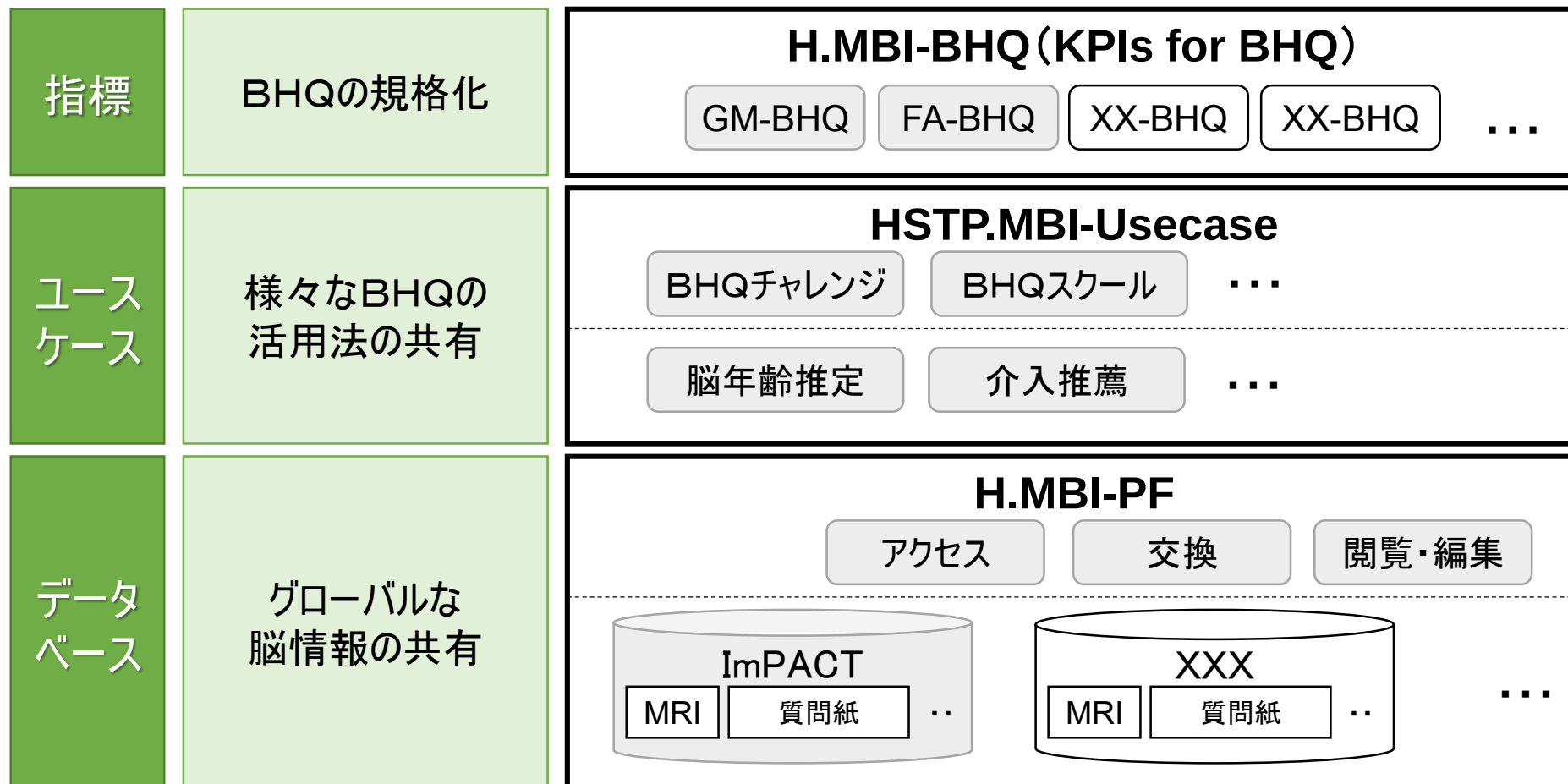
データシェアリングの標準化



複数の関係者で脳情報を共有する仕組みをシステム化し標準化を提案

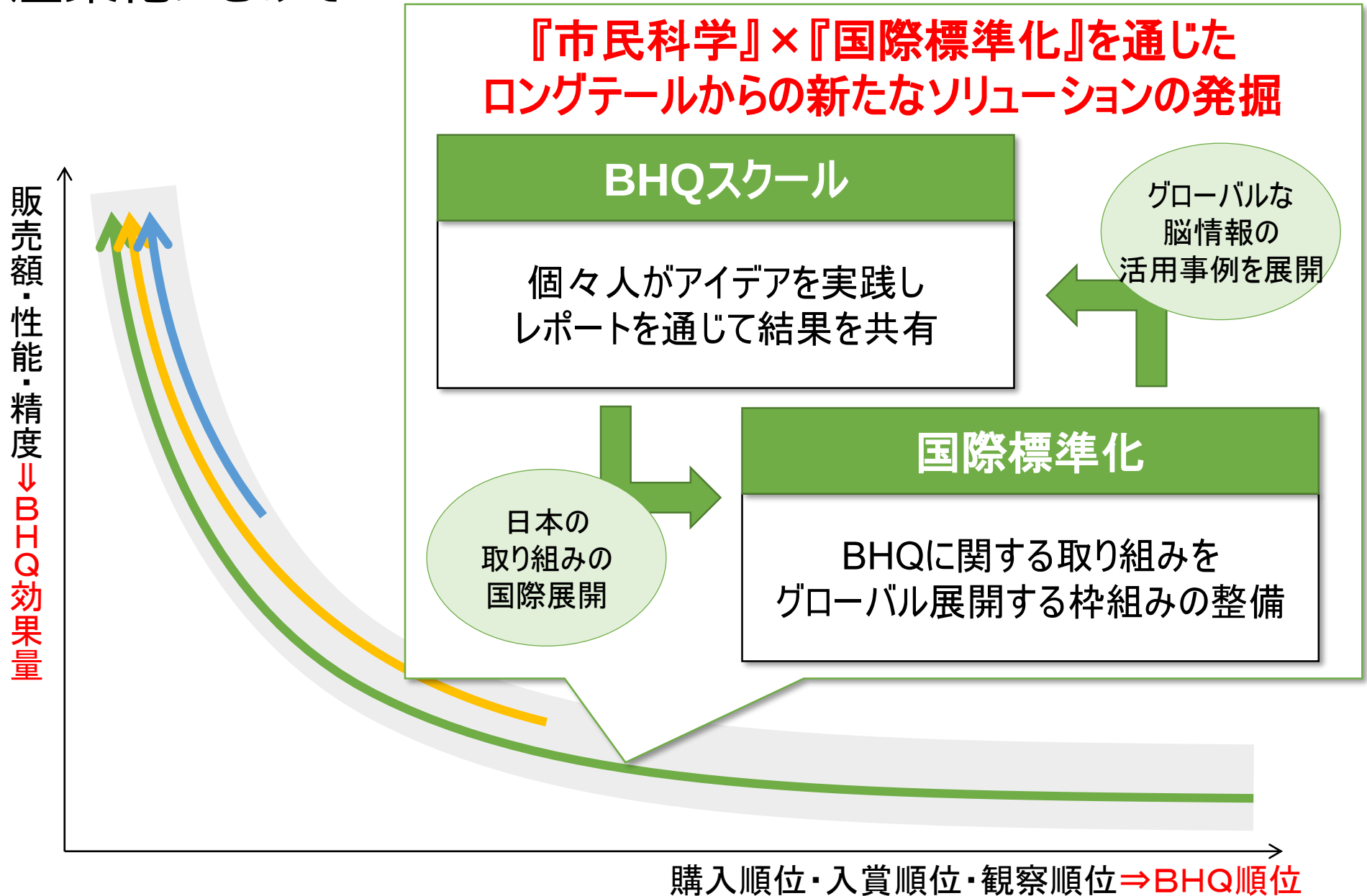
標準化活動の枠組み

 ImPACTでの取り組み



標準化活動を通じて
日本の取り組みをグローバルに展開可能とする枠組みづくりを推進

産業化にむけて



今後の展望

BHQスクール:

より多様なアイデアを共有可能にするための体制を整備

【現状】参加者:100名、介入期間:1ヶ月(2回撮像)

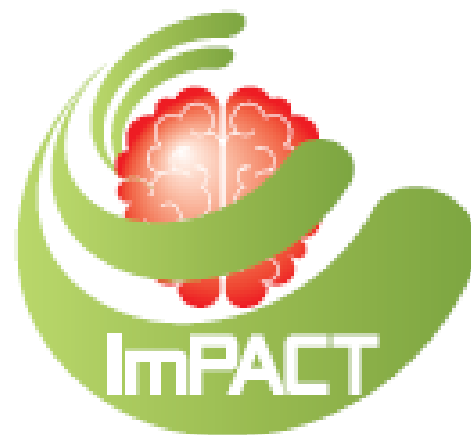
【将来】参加者:200名に増加、介入期間:3ヶ月へ長期化(年4回撮像)

脳情報の標準化:

BHQの標準化を進めるため、グローバルなネットワーク作りを加速

【現状】ITU-Tにて、データシェアリングとユースケースに関する勧告化に目処

【将来】WHOなどへのリエゾン提案、海外でのユースケースの実施を推進



**Brain
Business
Bridging**